

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03886

研究課題名(和文) 滞日ムスリムの生活世界の変容とムスリム・コミュニティの持続的発展

研究課題名(英文) Transformation of Muslims Life World and Sustainable Development of Muslim communities in Japan

研究代表者

店田 廣文 (Tanada, Hirofumi)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：20197502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：2005年から開始した滞日ムスリム調査研究の成果をふまえ、在日ムスリムの10年後の生活変容を把握することを予定したが、テロ事件等の影響で断念し、モスクが所在する地方自治体における多文化共生施策に関するアンケート調査と、全国的に活動しているイスラーム復興運動団体へのインタビュー調査と参与観察による調査研究を実施した。この他、新設モスクに関する情報収集と滞日ムスリム人口の最新推計を実施した。

また2009年から継続して開催している全国マスジド(モスク)代表者会議を、第8～10回まで継続して実施し、日本社会とムスリムとの関係構築にも尽力した。

研究成果の概要(英文)： We have conducted Social Surveys on Muslims living in Japan since 2005. At the beginning of this research project started from 2015, we were planning to conduct questionnaire survey on Muslims Life World in Japan. Due to terrorist attack in Europe and Bangladesh, we changed our research themes and conducted researches as follows: (1) Questionnaire survey on Multicultural symbiosis policy by Local municipality, (2) Interview and Participant Survey on organization and social activities by Tablighi Jamaat, (3) Survey on newly opened Mosques, (4) Latest estimation of Muslim population living in Japan.

We also held "Meeting of Representatives of Masjids in Japan" in 2016, 2017 and 2018. These are important activities for formation of mutual relationships between Muslim communities and Japanese communities.

研究分野：社会学

キーワード：イスラーム ムスリム 地域社会 多文化共生 イスラーム復興 イスラーム団体 モスク 人口推計

1. 研究開始当初の背景

滞日ムスリム(イスラーム教徒)人口は、2006年の6~7万人から2014年には12~13万人へ、モスク(イスラーム礼拝所)の数は、2005年の43から、2014年の80へと増加し、日本におけるムスリム・コミュニティの存在感はますます高まってきており、改めて滞日ムスリムの総合的調査を企画することとした。

わが国では、2000年代初めまでは、滞日ムスリムに関する社会調査として、イラン人を対象とした東京大学医学部保健社会学教室『上野の街とイラン人—摩擦と共生』(1992年)および筑波大学社会学研究室『在日イラン人—景気後退下における生活と就労』(1994年)があったが、少数に止まっていた。これら調査は、外国人労働者問題が顕在化した時期に日本に流入した外国人の一つの類型としてイスラーム社会出身者を対象としたもので、滞日ムスリムに焦点を当てた包括的調査とは言いがたいものであった。

一方、ニューカマー外国人に関する研究として、奥田道大他編『池袋のアジア系外国人』(1991年)をはじめ、梶田孝道他『顔の見えない定住化』(2005年)まで数多く出版され、また自治体による外国人住民意識調査も多数の報告書が刊行されていた。したがって在日外国人に関する調査研究は多数に上っていたが、滞日ムスリムに関しては、上記調査や桜井啓子『日本のムスリム社会』(2003年)の他は、特定の集団を対象とするインタビュー調査によるものが散見される程度であった。この背景には、滞日ムスリムの外国人人口に占める割合の量的な少なさがあったが、小さいながらもムスリム・コミュニティが各地に形成され、包括的な研究が必要であると考えられたことから、代表者は、2005年度より、滞日ムスリムの生活意識調査、全国のモスク調査、さらに日本人のイスラーム認識に関する地域間比較調査(岐阜市、富山県射水市、福岡県福岡市)を実施して、研究成果を発表してきた。

滞日ムスリム人口は、2000年代半ばから倍増し2013年末現在で約12~13万人(外国人ムスリム10万人、日本人ムスリム2~3万人)で、日本各地のモスクの数も2000年代半ばから倍増し、家族形成や定住化も進んで、第2世代も増加していた。高齢化も徐々に進んで東日本各地に5カ所のイスラーム霊園が開設されるに至っている。ハラール・ショップ(イスラーム法に則った合法的な食品等の販売店)も各地で営業し、加えて、エスニック・メディアも多数活動し、イスラーム団体の会報や新聞の発行、ウェブページやフェイスブックなどが開設され、滞日ムスリムに関する情報は日々更新され、活況を呈していた。滞日ムスリム・コミュニティの存在感はますます高まってきていたのである。

これまでの諸研究から明らかになったことは、滞日ムスリムの永住・定住化の深化と

第2世代の成長および日本人ムスリムの増加、イスラーム団体の制度化の進行と団体活動の活性化、日本及び地域社会とムスリム・コミュニティ間の交流や関わりの増加、そして世代交代の時期が迫りムスリム・コミュニティの将来像が問われる時期を迎えていることであった。以上に述べてきた滞日ムスリムの現況と課題については、店田廣文『日本のモスク：滞日ムスリムの社会的活動』(2015年)にまとめて発表した。

滞日ムスリムのニューカマーによるモスク建設が始まって30年近くたち、コミュニティの成熟と転換期を迎える頃となり、改めて、滞日ムスリムの生活全般の意識や実態に関する調査研究が必要と考えたのである。併せてムスリム・コミュニティの持続可能性を探るため、ソフトであるヒトの側面とハードであるモスクの側面を取り上げて、滞日ムスリムに対するアンケート調査、インタビュー調査とモスクなど団体調査の実施を企画した。

2. 研究の目的

本研究では、「滞日ムスリムの生活世界の変容とムスリム・コミュニティの持続的発展」という主題のもと、滞日ムスリムの生活と意識の実態および全国に分布しているモスクの最新の実態の把握と分析を通して、滞日ムスリム・コミュニティの持続的発展に係わる現状と課題をソフトであるヒトの側面とハードであるモスクの側面を取り上げて、検討することを当初の主な目的とした。

しかし、途中から主たる研究テーマをモスクが所在する地方自治体における多文化共生政策に関わる調査研究と、近年国内で活動しているイスラーム団体に関する調査研究を主たる目的とした。ただし、国内におけるモスク開設は依然として進行しているため、新規のモスク関連の調査や、ムスリム人口に関する推計などを目的とする研究も合わせて実施することとした。

3. 研究の方法

当初は、主に計量分析を目的としたアンケート調査(外国人ムスリムに加えて日本人改宗ムスリムも含む)(2)質的分析を目的としたインタビュー調査(滞日ムスリムだけでなく、モスク周辺の地域自治会、日本人住民、行政関係者も含む)(3)新たに開設されたモスク実態調査、(4)統計的分析によるムスリム人口の推計、の実施を計画していたが、研究目的の変更に伴い、(1)と(2)については、モスクが所在している地方自治体を対象とするアンケート調査と、国内で活発に活動しているイスラーム団体に関するインタビュー調査に変更して実施した。(3)(4)については、当初の目的通り実施した。

4. 研究成果

本研究は、当初の研究目的を変更して、遂

行した。その原因は、2015年から頻発した欧州における過激派によるテロ事件や、バングラデシュにおける日本人犠牲者がでたテロ事件の発生である。これら事件の影響は、国内におけるムスリムを対象とするアンケート調査やインタビュー調査の実施を困難にする要因となったため、途中から主たる研究テーマをモスクが所在する地方自治体における多文化共生政策に関わる調査研究と、近年国内で活動しているイスラーム団体に関する調査研究にシフトすることとした。ただし、国内におけるモスク開設は依然として進行しているため、新規のモスク関連の調査や、ムスリム人口に関する推計などの研究は継続して実施した。

これら研究の現段階での知見や成果は以下の通りである。滞日ムスリム人口は、2016年末現在の推計で、約17万、うち日本人ムスリムが約4万（うち第2世代以降の若者が2万5千以上）と顕著に増加している。日本における外国人人口増加が続いていることもあり、滞日ムスリム人口の増加は今後も継続すると考えられる。

一方、モスクの増加も顕著で、2014年の80から、2017年には105を超えた。ムスリム人口が増加しているものの、モスクの存在しない県もあることから、留学生などによる開設が今後も予想され、モスク増加は今後もしばらく続くものと思われる。

日本における多文化共生政策は、総務省などの指針をうけて、地方自治体レベルでのプラン作成や施策実施が行われている。本研究では、モスクが所在している地方自治体を対象として、多文化共生施策の現状と課題、および、モスク認知やムスリムへの対応について、アンケート調査を2017年後半に実施した。対象は、95自治体で、うち73自治体より有効回答をえた。この調査結果については、詳細な分析を含めて、2018年度以降の基盤研究(C)の課題として取り組む予定であるが、結果の一部は論文にて公表している。

結果の概略は以下の通りである。調査は、2017年11月から、モスク所在の95自治体を対象に、質問紙を使用した多文化共生施策に関する調査を郵送法により実施した。ムスリムやモスクに関する調査項目を設けて、地方自治体の認知や多文化共生施策の現状や課題について、調査した。これら地元自治体がモスクやムスリムにどのように対応しているかは、地域コミュニティとの関係構築の今後にも示唆を与えるものと思われる。

主な集計結果は、以下の通りである。まずモスクの所在について情報を持っていた自治体は7割であったが、3割は所在について「全く把握していない」であった。前者の自治体のうち、モスクを訪問したことがある自治体は2割にとどまったが、訪問目的は多文化共生推進のためなどと交流に積極的なところが見られた。具体的にどのような話し合いがなされたか尋ねると、訪日観光客受け入

れ、災害時の対応、外国人支援一般に関するものに分けられ、地方自治体側からイスラーム系宗教団体の協力を求めていることがうかがわれた。モスク開設の情報が事前にあったと回答した自治体は1割弱で、事前には「把握していなかった」とする自治体が7割にのぼった。

地方自治体が行っている多文化共生の取り組みで「ムスリム住民を特に配慮した取り組み」の有無について尋ねると、1割強の自治体が「ある」と回答した。その内容を見ると、イベント等でのハラール食や礼拝室対応、イスラームに関するセミナーなどの啓発活動であった。今後のムスリム対応での課題として、多い順に、災害時の対応、ハラール食の対応、次いでイスラームやムスリムに関する理解などをあげる自治体が、いずれも半数以上であった。学校現場での対応を課題とする自治体も5割弱、地域住民とのトラブルをあげる自治体も3割と少なくはなかった。課題は「特にない」とする自治体は1割未満である。

以上の単純集計結果の概略からみると、地方自治体のイスラームやムスリムに対する認知や関心は総じて高くはないものの、一部の自治体ではムスリムとの交流や協働が実施されており、その必要性は認識されている。またムスリム対応の課題は半数以上の自治体で認識されていると言って良い。しかし、モスクの所在を認知している自治体であっても、その7割は「今のところ、訪問する予定はない」と回答しており、交流に積極的とはいえないのが現状であった。

もう一つの調査研究として、近年、活動が顕著な国内におけるイスラーム復興運動団体タブリーギー・ジャマアト（北インド発祥のトランスナショナルな団体で欧州先進国での活動も活発である）に関するものがある。参与観察的な調査手法を用いて、同団体の活動に参加しており、データ収集の段階である。同時に、マレーシアや欧州での同団体の調査も実施して調査研究を進めている。

マレーシアでは、タブリーギー・ジャマアト（以下、TJ）の活動に関する聞き取り調査を実施した。TJは、日本においても外国出身のムスリムを中心に多くの支持者を集めている活動である。本調査は、日本とマレーシアのTJの組織形態の比較と、日本のTJの歴史的展開を明らかにする目的で実施した。調査地は、マレーシアのクアラルンプール郊外のスリペタリンに位置するTJの本部であった。調査においては、はマレーシアの活動を支える古参の活動家の方、は日本に滞在経験のあるマレーシア人活動家の方を中心にインタビュー調査を実施した。その結果、では組織形態や連絡系統において、多くの違いが明らかになった。では、1980～90年代に滞日していた活動家の方の話を通じて、これまで十分に明らかにされてこなかった当時のイスラーム復興運動の日本に

おける展開状況について詳細なデータを得ることができた。

また、主にイギリスでの調査は、日本のTJとの組織形態の相違の検証、ムスリムがマイノリティとして生活している社会における、周辺社会との関係のありようを検証する目的で実施した。調査は、TJのヨーロッパ本部が位置するデュースペリー、ロンドンの活動拠点、フランスの活動本部において実施した。では、組織形態の各国間での差異に関する詳細なデータを得ることができた。

では、英仏の活動家を通じて、周辺社会とのかかわりあいについて、特にムスリム・コミュニティと地域社会、宗教教育施設における多文化教育の視点から活動の経緯や実態について話を伺うことができ、日本における活動との類似点・相違点双方に関する貴重なデータを収集できた。同団体に関する、これら海外での調査および国内の調査の成果については、一部の発表に止まっており、分担者（岡井宏文）が得た新たな科研費基盤研究（C）の助成で2018年度以降も研究を継続する予定である。

この他、従来から実施してきた全国モスク代表者会議の第8回から第10回までを実施し、それぞれ、以下の様なテーマで実施し、滞日ムスリム・コミュニティと日本社会との交流を続けている。それぞれ以下のテーマで開催した。第8回「文化の翻訳を考える」（2016年）第9回「多文化共生とムスリム・コミュニティ」（2017年）第10回「日本のムスリム・コミュニティを問い直す」（2018年）である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 9 件)

店田廣文：2016 マレーシアにおける大学生の結婚と出生に関する意識—マラヤ大学学生意識調査 16 年間の調査結果より—、人間科学研究、29 巻 1 号、7-16 頁（査読あり）。

店田廣文：2017 日本におけるムスリム移民・難民の現状と課題、中東研究、528 号、3-15 頁、（査読無し）。

Bik Kai Sia, Hirofumi OKAI, Sor Tho Ng, Hirofumi TANADA and Nai Peng Tey, 2017, Intention to Migrate among International Muslim Students in Malaysia, *GATR Global Journal of Business and Social Science Review*, 5-4, pp.26-34. (査読あり)

店田廣文：2018 日本人ムスリムとは誰のことか、社会学年誌、59 号、109-128 頁、（査読無し）。

店田廣文：2018 日本におけるイスラーム系

宗教団体とコミュニティ、社会分析、45 号、75-94 頁、（査読無し）。

小島 宏 2015“Religion and the Use of Family Policy Measures in Japan, South Korea and Singapore” *Waseda Studies in Social Sciences* (『早稲田社会科学総合研究』)15 - 3、pp.1 - 21、（査読あり）。

KOJIMA, Hiroshi (2018) “Correlates of Halal Food Consumption in East Asia and Western Europe.” *Proceedings of the International Workshop on Halal Food Consumption in East and West* (with Appendix of Survey Report), Institute for Asian Muslim Studies, Research Paper Series, Vol.5. Tokyo: Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University, pp.49-62、（査読無し）。

村田久 2015 滞日ムスリムにおける宗教観と順応についての考察 環太平洋大学研究紀要 9 号、21-25 頁、（査読あり）。

村田久 2016「人口減少・移民・外国人観光客」*Estrela* 265 号、40-43 頁、（査読無し）。

〔学会発表〕(計 16 件)

店田廣文：2015 日本におけるムスリム・コミュニティの現状と課題。日本歴史学協会・日本学会史学委員会歴史認識・歴史教育に関する分科会主催 歴史教育シンポジウム「イスラームをどう教えるか」（駒沢大学）2015.10.17

店田廣文：2016 日本のイスラーム 滞日ムスリムの現状と課題。現時点に於ける北東アジア少数民族文化および特色教育学術セミナー。寧夏大学(中国・銀川市) 2016.11.07

TANADA Hirofumi 2016, Islamic Policy and Perceptions of Islam in Wartime Japan、International Seminar: “Islam and Multiculturalism: History, Challenge and Prospects” Waseda University, Tokyo 2016.12.04

KOJIMA, Hiroshi, 2015 “Household Structure and Halal Food Consumption among Muslim Immigrants in East Asia” The 3rd APA (Asian Population Association) International Conference Kuala Lumpur, Malaysia 2015.7.28

KOJIMA, Hiroshi, 2015 “Religion and Health in East Asia: A Comparative Analysis of the EASS2010” The 3rd APA (Asian Population Association) International Conference Kuala Lumpur, Malaysia 2015.7.28

小島宏、2015 滞日ムスリム留学生のトランスナショナルな家族とハラール食品消費行

動、日本中東学会第 31 回年次大会、同志社大学今出川校地、2015.5.17

KOJIMA, Hiroshi 2016 “Halal food consumption among Muslim migrants in Japan, South Korea and Taiwan.” Oral Presentation at the 2016 International Metropolis Conference, Aichi-Nagoya, October 24-28, 2016.10.26

KOJIMA, Hiroshi 2016 “Families, Friends or Foods?: Correlates of Integration and Wellbeing Among Muslim Immigrants in East Asia.” Oral Presentation at the 3rd ISA Forum of Sociology, July 10-14, Vienna, Austria 2016.7.11

KOJIMA, Hiroshi 2016 “The Effects of Transnational Family on Halal Food Consumption among Muslim Immigrants in East Asia.” Oral Presentation at the CRFR International Conference “Unequal Families and Relationships,” 13-15 June, John McIntyre Conference Centre, Edinburgh 2016.6.14

小島宏 2017 「西欧ムスリム移民二世におけるコーラン教室通学と宗教的食事制限」日本中東学会第 33 回年次大会、九州大学箱崎キャンパス 2017.5.14

KOJIMA, Hiroshi 2017 “Sibling Configuration and Dietary “Re-islamization” among Second-Generation Muslim Youth in Europe.” Oral Presentation at the 13th Conference of the European Sociological Association, Athens, Greece, 29 Aug.-01 Sept. 2017.9.1

岡井宏文、2015 日本のムスリム・コミュニティと地域社会、「宗教と社会」学会「現代社会における移民と宗教」プロジェクトシンポジウム、2015 年 11 月 於静岡大学

OKAI Hirofumi、2016 Overview of the Muslim community in Japan: Its development and relationships with the wider community, Council of Europe: Intercultural cities Tackling Prejudice and Engaging with Religious Minorities 2016 年 10 月 House of Peace and Human Rights, San Sebastián, Spain

岡井宏文、2017 在日イスラーム団体の形成と諸活動の展開：タブリーギー・ジャマアトと多文化的状況に注目して、第 33 回日本中東学会年次大会、2017 年 5 月 九州大学

岡井宏文、2017 日本におけるイスラーム団体の形成と活動の変容：イスラーム復興運動と成員の多様化に注目して、第 90 回日本社会学会大会 2017 年 11 月 東京大学

村田久 2017 地域における外国人とムスリムへの受容に関する研究、第 90 回日本

社会学会大会、2017 年 11 月 東京大学

〔図書〕(計 5 件)

岡井宏文、2016 イスラーム世界と在日ムスリム、146~163 頁、現代人の国際社会学・入門——トランスナショナリズムという視点 西原和久・樽本英樹編、有斐閣 2016 年 5 月 (分担執筆)

岡井宏文・店田廣文・小島宏編 2015 ヤングムスリムの将来設計——学ぶ・はたらく・生きる——第 7 回全国マスジド(モスク)代表者会議の記録 早稲田大学アジア・ムスリム研究所、早稲田大学多民族・多世代社会研究所・早稲田大学イスラーム地域研究機構、2015 年 12 月、62 頁。

岡井宏文・店田廣文・小島宏編 2015 地域コミュニティとマスジドの将来像——第 6 回全国マスジド(モスク)代表者会議の記録 早稲田大学アジア・ムスリム研究所・早稲田大学多民族・多世代社会研究所・早稲田大学イスラーム地域研究機構、2015 年 12 月、46 頁。

岡井宏文・店田廣文編 2016 「文化の翻訳」を考える——全国マスジド(モスク)代表者会議有識者会議の記録 早稲田大学多民族・多世代社会研究所・早稲田大学イスラーム地域研究機構、2016 年 12 月、119 頁。

店田廣文・岡井宏文編 2018 「多文化共生」とムスリム・コミュニティ——全国マスジド(モスク)代表者会議有識者会議の記録 早稲田大学多民族・多世代社会研究所・早稲田大学イスラーム地域研究機構、2018 年 2 月、102 頁。

〔その他〕

2009 年度より開設している滞日ムスリム調査ホームページに、これまでの調査報告書、全国マスジド(モスク)代表者会議の議事録、全国モスク調査の記録、最新の全国モスクリストなどを掲載し、随時更新している。

<http://imemgs.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

店田廣文 (TANADA Hirofumi)
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：20197502

(2) 研究分担者

小島宏 (KOJIMA Hiroshi)
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：90344241

岡井宏文 (OKAI Hirofumi)
早稲田大学・人間科学学術院・その他 (招

聘研究員)
研究者番号：10704843

(3)連携研究者

村田久 (MURATA Hisashi)
環太平洋大学・次世代教育学部・教授
研究者番号： 80350445